

# 年頭のごあいさつ

社団法人 北海道林産技術普及協会

会長 高橋 秀 樹



あけましておめでとうございます。平成16年の新春を会員の皆様とご一緒にお慶び申し上げます。

昨年は、当協会の創立50周年という節目の年でありました。4月には記念式典と祝賀会を開催し、8月にはカナダから環境コンサルタントのパトリック・ムーア博士を招いて、講演会とシンポジウムを開催しました。いずれも盛会裏に開催できましたことは、関係機関、会員の皆様のお陰と心から感謝申し上げます。

昨年を振り返って見ますと、4月に英米軍とイラクの戦争が勃発、フセイン政権が崩壊しました。現在そのイラク復興のため、日本の自衛隊派遣が決定し、主力部隊はなんと旭川の第2師団とのことです。遠くの国際紛争に、もはや日本が無縁でいることは出来ない世になって来た様です。

また、昨年は冷夏に加え、8月9日から10日にかけて接近した台風10号により、大雨の被害が発生しました。人命が失われ、流木が大量に発生するなど、大きな傷跡を残しました。9月には十勝沖地震が発生し、滅多に揺れない旭川も震度4の揺れに見舞われました。台風、地震でお亡くなりになられた方々には心からご冥福をお祈り致し、被害に遭われた方々には心からお見舞い申し上げます。

経済は相変わらず厳しい環境にありました。しかし後半に東京などの首都圏大企業の一部に業績の改善が見えております。暮れの日銀短観では景況感の好転を示唆しておりました。指標も株価の1万円代回復、円高などになっております。

我々が住む北海道はまだまだその兆しを感じられませんが、僅かに見られる景気の薄明かりは次第に北上すると期待致しましょう。

我が林業・林産業界が厳しい環境におかれて久しくなります。これは日本の基幹は輸出であり、その輸出品の見返りに、木製品の輸入は無制限となっています。よって日本の木材製造業は正に防戦の一途、そこに原料を供給する林業もコスト面で限界を超えているからです。

ともあれ、21世紀の現在、世の中は大きく変わりました。わが国の木材資源は天然林材が枯渇して、広葉樹は小径木、針葉樹は人工林からの小径木、間伐材が主流となり、樹種に注目すると、道内ではカラマツ、トドマツが、本州では造林スギが主流になりました。製品も乾燥材と集成材が当たり前の時代です。しかしながら、多くの新興発展諸国からの輸入品ラッシュで、木材製品デフレをもたらし、このままでは、わが国内において木材資源を利用した木材製造業が成り立たないところまで来ております。これからは、国家レベルで山づくりから製品化までの循環システムづくりが重要な課題と思います。一方、生活面では優良住宅のための製品保証制度と健康のための安全性が最重要課題となっております。

今後の林産試験場には、この循環システムの中での人工林資源の有効活用と加工コストの低減及び木材廃棄物の再利用やエネルギー利用などの技術開発、製品保証面では基礎資料による耐久性能、構造計算による強度性能の明示、健康面ではVOCやホルムアルデヒドの測定システムの確立や無害化の研究など幅広い役割が期待されます。わが(社)北海道林産技術普及協会は、北海道立林産試験場がより活躍できる環境づくりと、木材産業界の要望を汲み取るべく、鋭意努力してまいります。今年も変わらぬご指導、ご支援をお願い申し上げます。